

豊臣秀吉の一書翰

水 野 恭 一 郎

昭和四十七年の年始にあたり、始講式の講話をさせていただくことを誠に光榮に存じます。日本史の研究にたずさわる者として當然古文書に接する機会が多いのですが、古文書には、それが公文書であれ私文書であれ、その一つ一つが何らかの歴史の一こまを、その紙面の中に藏しています。一枚の古文書がわれわれに語ってくれるものは、長い歴史の流れからいえば、ある時期ある所における断片的な歴史の一こまではあるが、しかしそれぞれに、多かれ少なかれ、その紙面の背後に、その時々々の歴史をにない、われわれに何ごとかを話しかけてくれるもので、そこに古文書を讀むことの楽しみもあります。殊にある個人によつて書き記された手紙などには、その手紙が記された時におけるその人の心情、あるいは喜び、あるいは悲しみ、あるいは愛情、ときには激情というようなものが、その紙面ににじみ出て、往々にしてそれを讀む私たちの心に深い感銘を與えるものがあります。今日ここにとり上げてお話ししようとする秀吉の一つの書翰も、私がかつて目にした古文書の中で、私の心に忘れられない感銘を残したものの一つです。この文書は、元備前岡山藩主池田家所藏のもので、次のような内容のものです。

（今度）
こんどハ、せう入おやこのき、中（儀）く申ハかりも御さなく候。それさま御ちからおとし、御（愁）しうたん、すいりやう申候。われくも、こゝもとへまかりいて、てきあひ十ちやう十五ちやうにとりあひ候うへにをいて、おやこ

の人ふりよのき、われらちからおとし申事、(不慮) かすかきりも御さなく候。(數)

(左衛門)

一三さへもん殿・藤三郎との兩人なに事なき事、われら一人のなけきの中よろこひとハ、この事にて御さ候。兩

人ハせめてとりたて申候てこそ、せう入の御はうしを、をくり申へく候と、まんそくつかまつり候事。(芳志)

(途方)

(存)

一それさま、とほう御さあるましきとそんし候て、これのミハかり、あんし申候。せひと、がを御いたし候て、(子供達)

(子供達)

(肝)

(煎)

御なけきをやめられ、兩人のこともちのき、御きもをいられ候ハ、せう入おやこのとふらいにもなり申へく

候まゝ、せひとまたのミ申候あいた、御ねうはうしゆへも、ちからを御つけ候て給候へく候事。(女房衆)

一しゆくくらうしゆ、そのほか、のこり候にんしゆ、三さへもんとにつけ申候やうにいたしたく候あいた、その御

(覺悟)

(見)

(人數)

(筑前)

(覽)

(馳走)

(物詣)

かくこなされ、御しうたん御やめ候て給候へく候事。

(見)

(參)

(暇)

(城)

(守居)

(頑丈)

(唯今)

(手前)

一せう入をミさせられ候とおほしめし候て、ちくせんを御らんし候へく候。なにやうにもちそう申候。ものまいり

をもさせられ候やうにいたしまいらせ候はんまゝ、物をもきこしめし、身をかんでうになされ候て給候へく候

事。

(淺野彌兵衛)

(參)

(暇)

(城)

(守居)

(頑丈)

(唯今)

(手前)

一あさのやひやうへ申ふくめ、御ミまいにまいらせ候。われらまいり候て申たく候へとも、たゝいま、てまへのき

(懇)

(存)

(驢)

(下々)

(左)

(命)

(孫)

(委)

御ねんころのきをも、せめて御物かたり申候へく候。なにはにつけて、それさま御心のうち、すいりやう申候

て、御いとをしくそんしまいらせ候。かへすく御ねうはうしゆへも、このよし申たく候。まこ七郎まいらせ

(驢)

(下々)

(左)

(命)

(孫)

(委)

候。そこもとしたくさはき候ハんとそんし、御しろの留すいにつかハしまいらせ候。まこ七郎めも、いのちを

たすかり候も、せめて三さおとゝいのたになりかゝりにて候と、御うれしく思ひまいらせ候。くハしくハ、や

ひやうへ申まいらせ候へく候。かしく。

卯月十一日

ひて吉 (花押)

大御ち

まいる

人々申給へ

この書狀には年記がないが、天正十二年のもので、この書狀が書かれた二日前、四月九日には、秀吉が徳川家康の軍勢と尾張の長久手で戦つた、いわゆる「長久手の戦」が行なわれています。この時、池田家の祖である池田勝入（信輝）とその嫡男元助が、秀吉の軍勢の先鋒として出陣し、父子共に討死を遂げた。このことについて、秀吉が尾張の樂田の陣中から、美濃大垣城中の信輝の母養徳院に書き送つたのが、この書狀です。宛名が「大御ち」と書かれています。が、「御ち」は御乳であつて、御乳の人、乳母の意味です。信輝の母養徳院が、このように御乳の人と呼ばれたのは、養徳院はかつて幼き日の織田信長の乳母であつたことによるものです。

養徳院夫人は本來池田家の家付の女であつて永正十二年池田政秀の娘として生れ、その夫の恒利は瀧川家から養子として入り池田家を嗣いだ人です。しかし夫恒利は天文七年に三十歳で早く世を去り、夫人は二十四歳の若さで寡婦となつたのですが、この間天文五年に一子信輝を儲けており、以後、夫人の生涯の頼みは、この信輝の成長にかかれていたといえます。一方、信輝の生れた歳、夫人は織田信秀から特に選び迎えられて、當時三歳であつた信秀の嫡子吉法師、即ち後の織田信長の御乳人となり、信長の養育にも心を盡すこととなつたのです。やがて信長が成長し天下に覇を唱えるに至つたのちも、夫人は信長から「大御ち」と呼ばれて親しみ敬われ、一子信輝も信長の恩顧のもとに、その麾下の武將として次第に引立られ、天正八年には信輝は攝津國で十萬石を與えられるまでになつています。

ところが、それから二年後の天正十年六月二日に信長は本能寺の變に倒れました。信長の突然の死は養徳院夫人にとつて大きな衝撃であつたに相違ない。後年、養徳院が孫の池田輝政に書き送っている手紙の中で、信長および信秀の厚恩について述べ、妙心寺の桂昌院は、自分が總見院様（信長）の御爲に建てたものであることをいい、自分の没後は、位牌を、總見院様・桃巖様（信秀）の位牌とともに、桂昌院に立ててまつるようについており、夫人の信長に

對する愛惜の心情を察するに足るものがあります。

しかし、この信長の死にもまた大きな悲しみが、その後二年を出でずして、また訪れた。それが天正十二年四月、長久手の戦において、一子信輝および嫡孫元助を一時に失つたことです。信輝は信長の没後は秀吉に屬して、天正十一年には秀吉から美濃國で十三萬石を與えられ大垣の城を本據としていたが、四月九日長久手の戦に父子共に討死を遂げた。當時、信輝四十九歳、元助二十六歳です。養徳院はこのとき既に七十歳の高齡でしたが、信輝・元助を一時に失つたことは、老後の望み正に絶えはてた思いであつたことと察せられます。この時に、二人の死後二日目の四月十一日に秀吉から養徳院に、淺野彌兵衛（長政）を使いとして送られたのが、この書狀であつたわけです。假名書きの消息ですが、その書風からみて、秀吉の自筆ではありません。しかし、恐らく秀吉の口述を右筆がそのまま筆にしたとみてよいもので、その意懇切を極め、信輝・元助父子の死を深く悼み、その母養徳院の心の内を、愛情をこめておもいやる、秀吉の眞情が、文面にしみじみと語り出されています。

その大意を要約しますと、「このたびの勝入（信輝）父子のことは何と申上げる言葉もない。あなた様のお力落し御愁歎、お察し申上げる。自分も同じ戦場に在つて、二人を討死させたことは、力を落し申すことこの上もない。しかし三左衛門（信輝の次男輝政、二十一歳）および藤三郎（三男長吉、十五歳）の二人の御孫が無事であつたことは、自分としても悲しみの中の喜びであつた。この兩人を、せめて今後取り立て申してこそ、勝入が自分のために盡してくれた芳志にこたえる所以であると思つている。あなた様が、さぞかし途方にくれておられることと思ひ、そればかりを案じているが、どうか元氣をお出しになつて御歎きをやめられ、残つた二人の子供達のことには心を盡されるならば、それこそ勝入父子の弔いにもなることであるから、是非とも、そのように御頼み申上げる。また女房衆へも、あなたから力づけをしてほしい。また信輝の宿老衆そのほか残つた家臣の者たちは、引きつづいて三左衛門に付けるように致したく思つているから、そのことをよく御心得になつて、何とぞ御愁歎をやめていただきたい。そして今後

は、勝入にお會いになるお氣持で筑前（秀吉）に會つていただきたい。如何ようにもお世話致したく、物詣などもしていただきたく思っているから、食事などもよくお取りになつて御身を大切にし、丈夫であつてほしい。今すぐにもお見舞に行きたいが、陣中に在つてそのことかなわず、淺野彌兵衛にこの手紙を持たせて遣わすが、近いうちに暇をあけて親しくお見舞に参り、そのとき、せめて勝入父子の忠節のことどもを、お話し致したく思っている。とは言うものの、何かにつけてあなた様の御心の内をお察し申上げ、御いとおしさに堪えない。そちらの下々の者たちも城主を失つて驚き騒いでいると思うので、甥の孫七郎（後の豊臣秀次）を、お城の留守居に遣わす。この孫七郎は、勝入らの盡忠によつて命を助かつたもので、せめて遺された三左衛門兄弟のために力づけになることができばと思つてゐる」など、秀吉の懇篤の心情が、その文面に溢れ、養徳院も、この消息を手にして、悲しみの中にも、また大いに力づけられるものがあつたと察せられます。そして秀吉は、この後も絶えず養徳院夫人の上に心をくばり、しばしば書状を送り、また物を贈つて、いたわり慰めています。

秀吉が信長の跡をうけ、戰國の世を統一して豊臣の政權を樹立した。そのかげには、この信輝父子の場合のような、多くの人々の死があつたことは勿論です。太閤秀吉の榮光の座というものも、これら多くの人々の死の上に築き上げられたものであつたといえます。このようなことは戰國の世の習いであつたとは言つても、人の死ということには、いつの世においても重大なことです。秀吉にしても、やはり一個の人間として、人の死ということの重さ、悲しさについて、常に思ひを致すことがあつたであらうと思います。そのような秀吉の心情が、この養徳院に送つた消息には、眞にあからさまに吐露せられて、今においても讀む人の心の琴線に觸れるものがあり、榮光の英雄秀吉の一面における人間秀吉の姿がよくうつし出されているように思われます。

それとともに、また、このような一人の武將の死ということについて、戰國の世と今の世とでは、人の死生觀、死に對して付せられる價值觀は必ずしも同じであるとはいへませんが、死はまた、その一面で新しい創造につながるこ

ともあるものであることが思われます。信輝の死を、秀吉がこの消息の中でも「勝入の御芳志」といい、あるいは「ねんごろの儀」とも述べて、自分のために命を捨てたことを深く謝するとともに、この信輝の芳志を、遺された二人の子息輝政・長吉らの上に報いるべきことを誓っている。戦國武士の死生觀の中には、このような戦場における忠節の死は、それがやがては家を興すという新しい創造へ結びつくことの満足があつたと思われれます。

そして事實、この長久手の戦における信輝父子の死は、秀吉がこの手紙の中で養徳院に約束したように、信輝の遺子輝政たちの上に報いられて、やがて秀吉の政權のもとで、池田氏の大名家としての興隆の固い基礎が築き上げられることになる。即ち輝政はこの直後、秀吉から信輝の遺跡を繼ぐことを許されて、美濃國岐阜の城主として十萬石が與えられ、長吉には近江國蓮華寺で一萬石が與えられた。また養徳院夫人にも美濃國方縣郡長良の内で八百石が扶助力として與えられております。その後、天正十八年小田原の陣のちには、輝政は三河國吉田の城主として十五萬石に加増され、且つ、天正十五年からは羽柴、翌十六年からは豊臣の姓をも許される厚遇をうけています。そして更に文祿三年には、輝政はやはり秀吉の媒酌によつて、徳川家康の次女の督姫をその室に迎えている。かくして輝政は、ここにまた徳川家との間に深いつながりを持つことになつた。秀吉の死後、輝政が徳川氏に屬するようになつたのは、このような關係もあつたからです。

關ヶ原の戦には輝政は東軍徳川方の先鋒となつて殊功を立て、戦後、姫路城主に封ぜられて播磨五十二萬石を領し、のち更に備前二十八萬石、淡路六萬石を加封されて、播磨・備前・淡路三國を領する大大名となり、「姫路宰相百萬石」と稱せられた。現在のこつている姫路城も、この輝政の築造にかかるものです。なお輝政夫人の督姫は、輝政が姫路城に移つてのちは「播磨御前」と呼ばれ、慶長十八年輝政の没後は髪をおろして良正院と號し、元和元年に姫路で亡くなつていますが、徳川家康の娘であつた緣故から、京都の知恩院に葬られた。知恩院の塔頭で今も黒門の門前にある良正院は、この輝政夫人督姫の菩提のために建てられた寺院です。

また養徳院夫人は、このような徳川家との關係からも、徳川氏の時代になつてのちも家康からまた厚く遇せられ、慶長十三年十月に九十四歳という天壽を全うして世を去つています。夫人は二十四歳の若さで寡婦となり、その後、乳人として、また母として、その生涯の頼みとした織田信長、子息信輝にも先立たれ、戦國の世の武家の女性としての悲しみをかみしめながら激動の時代を生きた人であつたといえますが、その晩年、慶長八年三月八十九歳のとき孫の輝政に書き送っている消息の中で、「それさまみなく御はんじやうの事みまいらせ候て、ほとけになり申事、まんぞく申候」としている言葉には、幾たびかの悲境をこえて、晩年に至つてその心勞の酬われた満足の心情を汲みとることができるようです。この間、養徳院夫人が、信長・秀吉・家康という、この時代を動かした三人の武將たちから、それぞれ「大御乳の人」と敬稱され、常に親愛と尊敬をもつて遇せられていたことは、この夫人の並々ならぬ秀れた人柄をしのばせるものであり、池田家興隆の歴史の中で、養徳院が蔭の女性として占めた位置は、かなり高いものがあつたといつてよいと思われれます。秀吉が、この養徳院に送つた一通の消息を通じて、若干の感懷を述べさせていだいた次第です。